教師に「インタビュー」の指導はどこまで可能なのか

－教授すべき知識と育てるべき能力の検討－

釘宮　里枝・花坂　歩・岩崎　朋美

Is It Possible for Teachers to Teach "Interviews"?:

Examination of Knowledge to Be Taught and Ability to Be Developed

KUGIMIYA, R., HANASAKA, A. and IWASAKI, T.

大分大学教育学部研究紀要　第 45 巻第 1 号

2023 年 9 月　別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 45, No. 1, September 2023

OITA, JAPAN

教師に「インタビュー」の指導はどこまで可能なのか

－教授すべき知識と育てるべき能力の検討－

釘宮　里枝*・花坂　歩**・岩崎　朋美***

【要　旨】　「話すこと・聞くこと」の特徴は状況依存性の強さである。基礎的なスキルの習得に加え，場への適応力を育てなければならない。「学校」という閉じられた空間で生活している教師にとって，学校外の状況性を想定した授業を教室内で具現化することは難しい。本実践では実社会で活躍するプロのリポーターを招聘し，生徒を相手にしたインタビューを実演してもらった。本実践によって，教えるべき知識・技能の再確認ができたとともに，状況依存性への対応は一般の国語科教師が単独で行うには困難であることが実感として確かめられた。今後，現場においては外部人材の活用を積極的に進めるとともに，教育委員会や教員養成大学においては「話すこと・聞くこと」の実践力を高めるコンテンツを教師及び教職志望者に提供していくべきである。

【キーワード】　聞くこと　インタビュー　ホットシーティング　外部人材の活用　教師教育

Ⅰ　はじめに

「話すこと・聞くこと」の授業をする度に，あるいは見る度に，「これは，この子の人生にどう寄与していくのだろうか」と思うことが多い。生徒の現在及び未来において，当該の話す力・聞く力が発揮されるであろう場面を推定することはできるのだが，はたして，それは授業で学ばなければ発揮できない力なのか，あるいは，授業で身につけた通りに発揮できる力なのか，教科書を中心とした授業の限界を感じざるをえないことが多い[1)]。

これからの指導と評価は，観点別に，分離的に行う方法だけでは不十分であり，調和的な観点と合わせて実践していく必要がある（釘宮 2021）。釘宮・花坂（2020，2021）ではポートフォリオ評価に注目し，より長期的に，より多角的に学習者の資質・能力を見取ることを試みた。その一方で，やはり一つ一つの単元が重要であるという思いも拭えない。

花坂・山根（2018 : 32）では，「発話行為は状況に大きく依存しており，話す内容を心に決め

令和 5 年 5 月 23 日受理

＊ くぎみや・りえ　大分大学教育学部附属中学校（国語科）
＊＊ はなさか・あゆむ　大分大学教育学部言語教育講座（国語科教育）
＊＊＊ いわさき・ともみ　フリーリポーター

ておいても，相手に応じて，何を，どのように話せばよいのかが変化する。これは「話し方」といった形態的・方法的な範疇を遙かに超える大きな問題である。話し手は，場の雰囲気，相手の目線，表情，応答に常に配慮しながら，そして，同時に，自分の目線，表情，語の選択，言い方などにも細心の注意をし，相手と対面し続けなければならない」と述べている。そうした状況依存性の強さが「話すこと・聞くこと」の特質であり，そこで発揮される適応力こそが育てるべき力なのだろうと現在では考えている。

これまでは，構成主義的に身につけたい力と身につけたい力を線で結び，その関係性において学習者を見取る発想でポートフォリオ評価に取り組んできた。本稿に示す実践は，その「身につけたい力」そのものに豊饒性をもたせる試みである。

Ⅱ　「共創の聞き手」を育てるためのアプローチ

1　岩崎・花坂（2022）における研究の概要

岩崎・花坂（2022）では，「共創」をキーワードに，「聞く力」に注目した検討を行っている。

まず，聞き方において特に重要と思われる技術が「ペーシング」（pacing）である。「ペーシング」とは，呼吸のリズムや話すスピード，使う言葉，話の内容，声のトーン，姿勢，表情などを相手に合わせることである（岩崎・花坂 2022）。岩崎は，フリーリポーターという職業上の経験知から，「身振り手振りが多い人にはこちらも大きめのリアクションで，喋りのペースがゆっくりな人にはこちらものんびりと・・・，そのようにすることで，相手は自分のペースと等速で話しやすくなる」（p.271）と述べている。頷きによって賛同を示しながら，相手の発話の中から重要な言葉を取り上げて繰り返すことも話を深める上では有効であると述べている。

次に，「問い」である。岩崎によれば，聞き手による「問う」という行為には，話し手を行動に導く力があるという。質問を効果的にすることで，相手が物事に対して持っている視点や角度を変え，より一層，広く，深く考えられる状態になる。そのためには，自分の考えに引き寄せないようにする必要がある。相手の置かれた状況を的確に判断し，それに応じた質問をしていかなければならない。その他，岩崎・花坂（2022）では，「クローズド・クエスチョン」と「オープン・クエスチョン」に関する例が挙げられている。

この岩崎・花坂（2022）からは，呼吸のリズム，話すスピード，声のトーン，姿勢，表情，使う言葉，頷き，重要な言葉を取り上げて繰り返すといったコミュニケーション上の基礎スキルを確認できるとともに，話し手においては相手視座でいることの重要性が明確になった。さらに，質問を効果的にすることで相手がより一層，広く，深く考えられる状態になるということは，「聞く」というよりはむしろ「創る」であり，「話すこと・聞くこと」における指導事項の「オ　話題や展開を捉えながら話し合い，互いの発言を結び付けて考えをまとめること」に通じる重要な特質であると言える。

2　現職のフリーリポーターを活用した劇空間の創出

「話すこと・聞くこと」における状況依存性に応じる力を主題にした授業を実現したい。そこで注目したのが花坂（2017）で紹介されていた「ホットシーティングによる内面吐露」である。「ホットシーティング」は，「テキストの内容やある場面の登場人物の心情などをより深く理解するために，教師や学習者が登場人物となって，質問したり答えたりする技法」（渡部他

2010：56）である。簡略に言えば，質問者と回答者がある特定の人物になりきって質疑応答を繰り返すというものである。その質問を受ける人物が座る椅子を「ホットシート」と言う。

この「ホットシーティング」は自分とは別人格を演じることを基本とする技法なのだが，ホットシートに座り，全員の前で質問に答えるという状況設定は，別人格に限定せずとも，学びを豊かにする上で効果的であると考えている。花坂（2017）では，中田（2008）による以下の２つの言説を紹介した上で，その教育的意義を述べている。引用の下線は稿者による。

> 聞き手である子どもたちのそれぞれは，話し手の発表を主題的に聞きながら，同時に，非主題的には，自分以外の多数の他の聞き手たちも，自分と同じような仕方で話し手の話を聞いている，ということを意識しているはずです。（中田 2008：242）

> それまでは私と共に一緒に聞き手であった多数の他者の中から，或る一人が発表することになると，その話し手は，それまで聞き手であった個々の私を代表してくれていることになります。また，その時の話し手は，それまでは多数の他者と一緒に考えていたことを背景にして，つまり，そうした他者に支えられて，話をすることになります。こうしたことからも，話し手ではなく，実は聞き手が授業を支えているということ，それゆえ，一斉授業では他者の話を聞くことが非常に重要な役割をはたしている，ということが明らかになります。（中田 2008：243-244）

以下は，上掲の言説を受けての花坂の言説である。

> この教室の児童たちはホットシートに座る児童の応答を視覚的にも聴覚的にも観察しながら，その応答の妥当性を主題的に考えているだけではない。同時に，その代表者たる児童の応答を他の児童はどのように考えながら聞いているのだろうと他者の思考に思いを寄せたり，それを教師はどのように評価しながら聞いているのだろうと伺いながらいると考えられるのである。これらは一人一人を同時に活動者にする授業では起こしにくい重層的な現象である。（花坂 2017：149-150）

すなわち，ホットシーティングによって，学習者らは話し手・聞き手という二者間を行き交う発話そのものにとどまらず，その二者を取り囲む学習者，それを聞く指導者をも思考の範疇に含めて学べるようになるというのである。これを花坂は「重層的な現象」と言っている。

本実践においては，現役のフリーリポーター（岩崎朋美）の参画によって，生み出される場の緊張感をより刺激的なものにしようとした。多くの生徒にとって，現役のフリーリポーターから直接のインタビューを受けるという経験はほとんどない。初対面で，しかもテレビで目にすることも多い大人からのインタビューともなれば，発話そのものはもちろんのこと，一つ一つの発話を聞くその他の生徒にも大きな緊張感が生まれることだろう。それは決して場を萎縮させるような緊張感ではなく，好奇心ともいうべき開かれた緊張感である。そのようにして，生み出される重層性を際立てることにした。

Ⅲ　指導計画

１　指導目標（評価規準）について

本単元では，学習指導要領に示される〔知識及び技能〕の内，「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」の「ア　音声の働きや仕組みについて，理解を深めること」及び，〔思考力，判断力，表現力等〕の内，「Ａ　話すこと・聞くこと」の「エ　必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること」の指導を行うこととした。

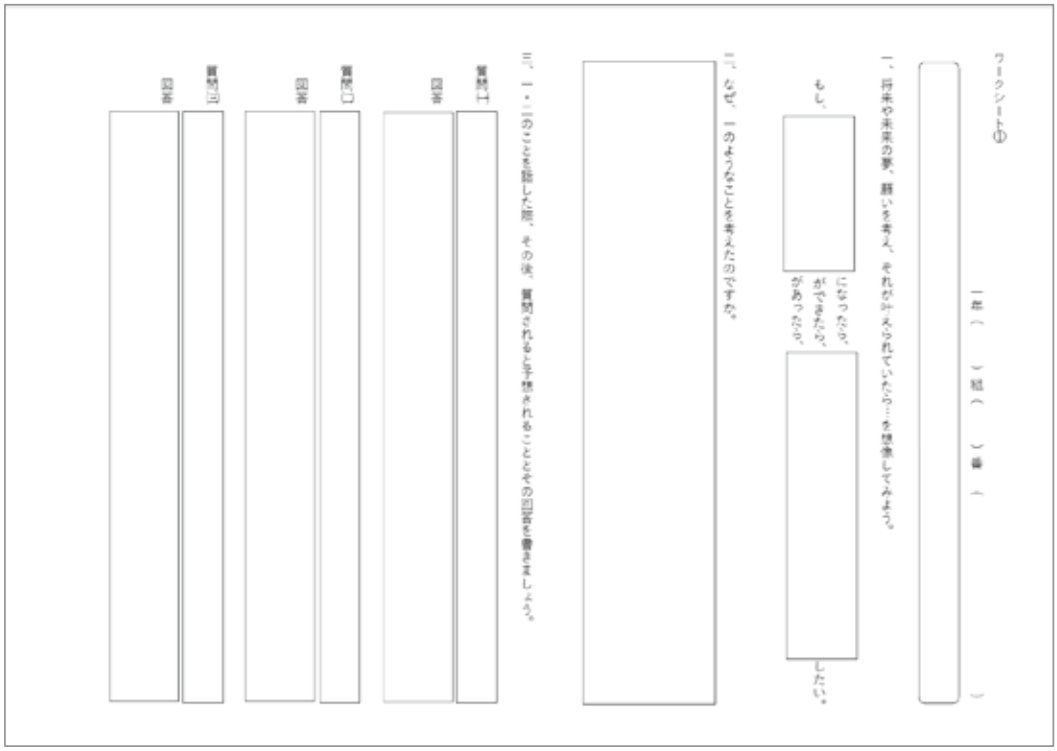
「ア　音声の働きや仕組みについて，理解を深めること」は，伝達機能を中心とした「音声の働き，音節の基本的な構造などへの理解を促す」ことの他，「アクセント，イントネーション，プロミネンス（文中のある語を強調して発音すること）などの音声的特質が多様な声を作り出し，話したり聞いたりする活動に影響していることを理解し，日常の言語活動を振り返る契機にすることが重要である」とされている。本単元では，実際のインタビューを通して，種々の「音声的特質」に注目させたい。

「エ　必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること」については，「記録したり質問したり」といった言語活動を通して，「効果的な記録の取り方ができるようにすることが重要である」とある一方で，「話し手に質問する際には，その場の状況に応じて話の途中で質問したり，話が終わった時点で質問したりするなど，質問の適切な機会を捉えるとともに，話し手が伝えたいことを確かめたり，足りない情報を聞き出したりするなど，知りたい情報に合わせて効果的に質問することが重要である」ともある。相手に配慮しながら，相手からの情報を取りこぼさないことが求められている。そして，「聞き取ったことと自分の考えとを比較し，その共通点や相違点を踏まえて，自分の考えをまとめることが求められる」ともある。この指導事項には，「記録」，「応対」，「思考」の３つの行為が示されていると言えよう。本単元では，実際のインタビューを通して，特に，「応対」を重視し，可能な限り，「思考」の充実を試みた。

２　指導と評価・ふりかえりの計画

対象は中学校１学年の 159 名（39～40 名×４クラス）である。授業は，単元名を「魅力を引き出すインタビューの神髄を探ろう」とし，全３時間で構想した[2)]。１時間目には目標の確認と，単元の見通し，次時のための準備を行い，２時間目に現役のフリーリポーターである岩崎朋美との対談，３時間目に演習と振り返りを行った。１時間目と３時間目については当該学年の国語科担当である釘宮里枝（大分大学教育学部附属中学校教諭）が指導し，２時間目については岩崎の他，花坂歩（大分大学教育学部教授）が授業を行った。

１時間目に釘宮がしたことは，インタビューを受けるための準備として，将来の夢や今持っている願いについて，生徒から引き出すこと及び教科書を用いての聞き方スキルの確認である。ここでは，「もし・・・だったら」という学びの手引きを用いて，思考を言葉に置き換えることが苦手な生徒を支援するとともに，架空の夢や願いでもよいこととし，自己開示が苦手な生徒の負担を軽減できるようにした。そのようにして，想像を広げ，その理由とどんな質問が想定されるのかを考えさせた（図１）。指導した聞き方スキルは，「相づちを打つ」，「聞いたことをくり返す」，「相手の言葉を引用して質問する」，「他の言葉で言い換えて確かめる」，「絞る質


ワークシート①

一年（　　）組（　　）番（　　）

一、将来や未来の夢、願いを考え、それがかえられていたら…を想像してみよう。

もし、

になったら、
ができたら、
があったら、

したい。

二、なぜ、一のようなことを考えたのですか。

三、一・二のことを話した際、その後、質問されると予想されることとその回答を書きましょう。

質問Ⅰ

回答

質問Ⅱ

回答

質問Ⅲ

回答

図１　授業で用いた「ワークシート①」

図 2.1　インタビューの様子（聞き入る姿勢）

図 2.2　インタビューの様子（応じる姿勢）

問（クローズド・クエスチョン）」，「広げる質問（オープン・クエスチョン）」である。こうした基礎的な聞き方スキルが実際のインタビューでどのように使われているかに注目させようとした。

２時間目には，インタビューをする際にどのような聞き方スキルがインタビュアーに必要なのかの説明を行った後，岩崎が中心となって中学生と対談形式で実演を行った（図 2.1，図 2.2）。

図 2.1 に注目すると，インタビュアーの岩崎の上体が少し中学生に寄っているのが見て取れる。その分，少し顎を上げ，中学生を上目遣いで睨み付けないよう，バランスをとっている。もう一つの図 2.2 に注目すると，今度は上体を少し引き，それと連動するように顎も引きながら，左腕を制止の形で差し出している。これは一見すると否定の型であるが，そうではなく，話し手である中学生の話に聞き入りながらも真摯に応じている様子となっている。

また，インタビューの内容は１時間目に準備したものが中心となるが，あえて，受け手が想定していない質問を含むようにした。「話すこと・聞くこと」が特質として持つ状況依存性を強めるためである。なお，このインタビューの実演では，プロのインタビューと素人（アマチュア）のインタビューを比較するために，あえて花坂が聞き手となる対談も実施した。

３時間目には，再び釘宮が担当し，前時の記録動画をもとに演習を行い，振り返りを行った。振り返りの内容は，主には，プロである岩崎のインタビューとプロではない花坂のインタビューの比較である。その際，習得すべき知識・技能の確実な定着をはかるために，１・２時間目に学習した聞き方スキルを思い出すように促すとともに，聞き方スキルの使い方の違いが話し手にどのような変容をもたらすのかを省察させた。

各時間における「ねらい」と「振り返り」のポイントは以下のとおりである。

【 第１時：準備 】　本時は学習者の動機付けに専念する。その際，「音声の働きや仕組み」や「話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること」に関心を向けさせることができればより望ましい。評価の方法は全体観察を主とし，執拗な振り返りはしない（学習目的に確認に止める）。

【 第２時：本番 】　本時は体験としての学びの充実に専念する。評価の方法は全体観察を主とし，執拗な振り返りはしない（次時の予告に止める）。

【 第３時：省察 】　本時は省察の学びが充実するよう留意する。「音声の働きや仕組み」や「話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること」についてはその到達度をワークシートによって確認する。評価の方法は個別点検及び事後分析とする。

Ⅳ　学習者における現れ

図 3.1 と図 3.2 は第３時に行った学習者の「ワークシート②」の一部である。

このワークシートは，知識・技能に相当する「聞き方スキル」について，「職業人（プロ）の実演」と「素人（アマ）の実演」による２観点比較を促すように作成している[3)]。さらに，そうした「聞き方スキル」が話し手（回答者）にどのような変容をもたらしたかを考えさせるために，「観察と考察②　自分や相手にどんな変化が起きただろうか」を設けている。

図 3.1 と図 3.2 の記述を見ると，学習者は，「強弱」，「ゆっくり」，「明るい声」といった音声的特質に注目しているとともに，「うなづき」，「おうむ返し」，「話がつながっている」といった既習の聞き方スキルを比較という思考によって想起及び整理していることがわかる。さらには，「笑顔」，「リアクション」，「マニュアルどおり」，「おちつきなし（ソワソワ）」などは話し手の

態度に関するものであり，音声的特質や聞き方スキルとは異なる観点で省察していることがわかる。

図 3.1　授業で用いた「ワークシート②」

図 3.2　授業で用いた「ワークシート②」

次に示すのは同じく第３時に行った学習者のワークシートの総括部にあたる「自分の考えの整理（ふりかえり）　※魅力を引き出すインタビューの神髄について考える」である。下線部は稿者による。

【例１】　マニュアル通りというよりも，相手の話を受け止め，その回答から話題を広げていく。相槌を打ったり，声を大にして反応したり，回答を自分の言葉で言い換えたり，反応をすると，相手は話を聴いてくれていることを感じて，すらすらと言葉を出すことができる。

【例２】　インタビューする人がとまどっていたら相手もとまどうし，逆に明るく楽しそうにすれば，相手も明るくもっとはなしたいと思える。だから，インタビューする側は，おちついて明るい声ですることが一番大事。

【例３】　私はプロの方はずっと笑顔で話しやすそうだったけど，アマの方はところどころ違う話になって質問に答えにくそうでした。この実演を通して，インタビューをする際に大切なことは，一つの質問から細かく話題を広げることだと感じました。

学習者の振り返りを見ると，「話題を広げていく」，「相槌を打ったり」，「声を大にして反応したり」，「自分の言葉で言い換えたり」といった聞き方スキルについて省察する者（例１）もい

れば，そうした「聞き方スキル」よりも，「とまどう」，「明るく楽しそうに」，「おちついて」といった質問者の態度について省察する者（例２），「プロの方は・・・アマの方は」のように比較を強調する者（例３）もいた。図 3.1 と図 3.2 と同様に，聞き方スキルや話し手の態度について省察していることがわかる。

Ⅴ　授業実践後の省察

本実践が参考にした「ホットシーティング」は自分とは異なる登場人物に「なってみる」ことを要求する技法である。今回の採り入れ方は，「自分とは異なる登場人物」ではないため，厳密には，「ホットシーティング」とは言えないかもしれない。しかし，集団の視線の前に自らを投げ出すという行為は，いわゆる「素の自分」ではない「もう１人の自分」を演じなければならない状況を生む。しかも，相手は地元テレビで有名なフリーリポーターであるし，自らが為す発話は教室内の他者が見聞きしてもいる。そこに「重層的な現象」が発生していることは当事者の多くが強く実感したことであろう。

特に，今回は，現職のフリーリポーター（岩崎朋美）の協力を得ることができたため，「インタビューの神髄」をめあてに掲げ，よりよいインタビューとは何かを思考する単元を構想することができた。「Ⅳ　学習者における現れ」で示したように，学習者は教科書記載の基礎的なスキルをプロとアマの比較によって確かめるとともに，笑顔，明るい声，会話のテンポの取り方，喜怒哀楽の示し具合といったインタビュアーの応対の見事さに触れることができていた。これらは言葉では表現しきれない臨場感といってもいい。

次に評価についてである。「Ⅰ　はじめに」で「身につけたい力」そのものに豊饒性をもたせると述べたが，１つには上述のインタビュアーの応対の見事さがそれにあたる。２つめに，学習者に将来の夢や今持っている願いについて，架空の夢や願いでもよいこととしたこと，「もし・・・だったら」という学びの手引きによって仮定性を強めたことも工夫の一つである。指導事項を超えたこれらのことを本実践においては豊饒性とみなしている。そうした「豊饒性」の見取りについては単元全体における観察評価だけで十分であると考えている。Ⅲの「２　指導と評価・ふりかえりの計画」に示した「ねらい」と「振り返り」のポイントもできる限り簡略にしている。これには評価負担を減らしたいという実務的理由もある。

今後，現場においては外部人材の利活用を含めた地域連携を積極的に進めるとともに，教員の養成・研修においても，「話すこと・聞くこと」に関する実際的なスキルの訓練を採り入れていくことが強く望まれる。

Ⅵ　おわりに

本稿に示した実践に新規性がほとんどないことは自認している。指導構造についても，授業者がアウトラインを整え，外部人材が自身の専門的スキルを発揮した後に省察の時間をとるという単純なものである。しかし，そこで生み出されていた学びは，時代が求める予測困難性への対応を念頭に，「話すこと・聞くこと」の特質に即した「主体的・対話的で深い学び」であったと考えている。引き続き，日常の授業を丁寧にする営みを大切にしていきたい。

附記
本稿は釘宮，花坂，岩崎が共同で作成した。本研究全体の総括は釘宮が行い，言説の細部において花坂，岩崎と協議を行っている。なお，本研究は JSPS 科研費 JP19K02735 の助成を受けての成果である。

注

1）類似の問題意識は，岩崎・玉野井・花坂（2023），花坂（2018）においても述べている。
2）授業の詳細については，資料 1 を参照。
3）ワークシート作成時にはプロインタビュアーである岩崎の技術と生徒の技術の違いを比較させようとしていた。そのため表記が「中学生（アマ）の実演」となっている。その後，そのままでは当該生徒に不要な劣等感を抱かせることになると気付き，当日は，共同研究者の花坂が素人の代表として岩崎との比較対象を演じた。その他，ワークシートでは「表現スキル」とあるが，その後，「聞くこと」に焦点化したため，本稿では「聞き方スキル」を用いている。

参考文献

岩崎朋美・玉野井ちさと・花坂歩（2023）教師に求める音声表現スキルの内容と指導方法：「玉野井メソッド」の報告と検討，国語探究，2，44-55
岩崎朋美・花坂歩（2022）話し手との共創感を強める「聞き方」について：コーチング理論からの示唆のまとめ，国語論集，19，267-276
釘宮里枝（2021）観点別評価の効果を高めるための基礎的検討：連続性をもたせた統合的評価を目指して，国語論集，18，231-238
釘宮里枝・花坂歩（2020）生徒の自立を促す自己評価サイクルの開発と試行：運用可能なポートフォリオ評価を目指して，国語論集，17，202-210
釘宮里枝・花坂歩（2021）ポートフォリオ評価を用いた自己調整力の育成：中学校国語科の通年指導の記録の検討，大分大学教育学部附属教育実践センター紀要，38，1-10
中田基昭（2008）『感受性を育む―現象学的教育学への誘い』　東京大学出版会
花坂歩（2017）読みの「深さ」と「豊かさ」についての考察：演劇的手法を検討の材料として，国語論集，14，145-156
花坂歩・山根紫野（2018）「話すこと・聞くこと」におけるリアリティ：教師に必要な話し合い観の基礎，国語の研究，43，27-34
渡部淳・獲得型教育研究会（2010）『学びを変えるドラマの手法』　旬報社

（資料１）本授業実践における単元計画

単　元　計　画（全３時間）

単元名	魅力を引き出すインタビューの神髄を探ろう（教材名：中１・聞き上手になろう）
単元の目標	インタビューの観察＆演習を通して，相手の発話を引き出しながら，相手に寄り添った内容理解に努め，他者及び自己の考えを形成していくことができる。
単元の評価規準	(1) 音声の働きや仕組みについて，理解を深めている。〔知・技，(1)ア〕 (2)「話すこと・聞くこと」において，必要に応じて記録したり質問したりしながら，話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめている。〔思・判・表，A，エ〕 (3) 上記(1)及び(2)について主体的に取り組もうとしている。

学習活動（各50分）	指導上の留意点	備考・評価
第１時〔方向付け〕 担当：釘宮	○ 学習への意欲喚起と方向付け ○「もし」から始まる問答集の作成（将来や未来の夢，願い，その理由・きっかけ，想定される質問） ○ 教科書を用いた基礎学習（光村，pp.116-117）「聞き方の工夫」，「質問の種類」等	評(3) 観察 ワークシート① 評(1) 観察①
第２時〔学びの習熟〕 担当：岩崎・花坂	○ インタビュースキルに関するミニレクチャー ○ 対談形式のインタビュー実演（２～３回） 任意の生徒を指名し，５分程度の対談を行う。インタビューでは前時のワークシートを基本とするが，想定質問以外の質問も随時取り入れる。 ○ 総括	評(1) 観察②
第３時〔学びの昇華〕 担当：釘宮	○ 前時の復習（記録動画の視聴） ○ 演習 ○ 学びの振り返り（省察） 「聞き方スキル」と「インタビューによる自己の変化」を，「職業人（プロ）の実演」と「素人（アマ）の実演」の比較によって考察する。 ○ 総括としての省察	評(1)・(2) 本点検 ワークシート② 回収後，(1)・(2)・(3)の分析評価

評価基準	(A) Ｂに加え，インタビューそのものについて，深く広く省察することができている。 (B) 音声の働きや仕組みの理解に加え，必要に応じて記録したり質問したりしながら，話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめている。 (C) Ｂができていない。

Is It Possible for Teachers to Teach "Interviews"?:

Examination of Knowledge to Be Taught and Ability to Be Developed

KUGIMIYA, R., HANASAKA, A. and IWASAKI, T.

Abstract

“Speaking / Listening” is a language act that strongly depends on the situation. Teachers must develop the ability to adapt to the situation as well as basic communication skills. It is difficult for teachers to develop skills that can be used in society. This is because teachers live in a closed space called "school". Teachers know too little outside of school. In this practice, we invited a professional reporter who is active in society and asked her to demonstrate the interviews with the students. Through this practice, we were able to reconfirm the "knowledge and skills that should be taught" and realized that it is difficult for the average Japanese language teacher to develop the ability to adapt to the situation on his own. In the future, teachers should actively promote the use of external human resources. At the same time, boards of education and universities that train teachers should provide teachers and students with content that enhances their practical ability to speak and listen.

【Key words】 listening, interviews, hot-seating, utilization of external human resources, teacher education